徳保薬環セ年報　No.15　54-59（2025）

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（2024 年）

徳島県立保健製薬環境センター
石田　弘子・新田　真友・中村　祐子

Infectious Diseases Surveillance Reports in Tokushima Prefecture in 2024

Hiroko ISHIDA, Mayu NITTA and Yuuko NAKAMURA

Tokushima Prefectural Public Health，Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

Key words：感染症発生動向調査 Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases

Ⅰ　はじめに

当センターでは，「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして，徳島県における感染症の発生情報の収集，解析を行っている．解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し，感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている．

今回，2024 年 1 月から 12 月までの患者発生状況についてまとめたので報告する．

Ⅱ　方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は，「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症，新型インフルエンザ等感染症の 91 疾患（全数把握対象疾患），指定届出機関から届出を受ける 26 疾患（定点把握対象疾患）とした．

感染症の発生情報は，定点把握対象疾患のうち，内科，小児科，眼科及び基幹定点週報分は，月曜日から日曜日までの週単位で，性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った．

Ⅲ　結果及び考察

1　全数把握対象疾患の届出状況（表 1）

（1）一類感染症

一類感染症の届出はなかった．

（2）二類感染症

①　結核

年間届出数は 117 件で，前年（80 件）より増加した．診断の類型では，「患者」が 91 件（内訳：肺結核 58 件，その他の結核 26 件，肺結核及びその他の結核 7 件），「無症状病原体保有者」は 26 件であった．年齢別にみると，70 歳代（25 件），80 歳代（26 件），90 歳以上（26 件）と，70 歳以上の届出が合計 77 件と全体の約 66%を占めた．また，20 歳代が 12 件と前年（2 件）より増加しているが，この年代の推定感染地は，国外 8 件，国内 3 件，不明 1 件であった．性別では，男性 55 件，女性 62 件と女性が多かった．

（3）三類感染症

①　腸管出血性大腸菌感染症

年間届出数は 19 件で，前年（11 件）より増加した．月別の届出数推移では，7 ～9 月に 14 件と約 74%を占めた．年齢別では，10 歳未満 ～70 歳代まで幅広い年齢層で届出があり，性別では，男性 6 件，女性 13 件であった．診断の類型では「患者」が 12 件，「無症状病原体保有者」が 7 件と「患者」が多く，症状は腹痛，水様性下痢，血便，発熱など複数の症状を訴えていた．血清型別は，本疾患の多くを占める O157 が 11 件，O111 が 5 件，O103 が 2 件，O121 が 1 件であった．

推定感染経路は，経口感染 9 件，接触感染 1 件，経口感染又は接触感染 2 件，不明 7 件で，推定感染地域は，国内 14 件，不明 5 件であった．

（4）四類感染症

①　A 型肝炎

年間届出数は 1 件であった．推定感染地域は国外（パキスタン）で，推定感染経路は不明であった．

②　日本紅斑熱

年間届出数は 8 件で，前年（7 件）より増加した．届出月

は8～11月と，マダニの活動時期と一致していた．年齢別は60歳代2件，70歳代6件で，性別は男性4件，女性4件であった．推定感染経路はマダニ等による動物・蚊・昆虫からの感染で，推定感染地域は県内であった．

③　レジオネラ症

年間届出数は23件で，前年（14件）より増加した．内訳は，病型では肺炎型20件，ポンティアック熱型2件，無症状病原体保有者1件であった．年齢別では30歳代1件，40歳代1件，50歳代3件，60歳代4件，70歳代5件，80歳代4件，90歳代5件であり，性別は男性13件，女性10件であった．推定感染経路は水系感染6件，塵埃感染3件，水系または塵埃感染1件，その他4件，不明9件であり，推定感染地域は国内22件，不明1件であった．

（5）五類感染症

①　アメーバ赤痢

年間届出数は3件であった．内訳は，病型では腸管アメーバ症2件，腸管外アメーバ症1件であった．年齢別は50歳代1件，60歳代2件で，性別はすべて男性であった．推定感染経路は性的接触1件，その他2件で，推定感染地域は国内2件，国外（シンガポール）1件であった．

②　ウイルス性肝炎

年間届出数は1件で，過去10年間の届出数は0～2件で推移している．年齢は10歳未満で，性別は女性であった．病原体はコロナウイルスOC43及びヒトライノ／エンテロウイルスが検出されており，推定感染経路は不明で，推定感染地域は国内であった．

③　カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症

年間届出数は10件であり，前年（1件）より増加した．内訳は，性別では，男性7件，女性3件で，年齢別では，50歳代3件，60歳代1件，70歳代1件，80歳代2件，90歳代3件であった．推定感染経路は手術部位感染2件，以前からの保菌1件，医療器具関連感染又は手術部位感染又はその他1件，その他2件，不明4件で，推定感染地域はすべて国内であった．

④　急性脳炎

年間届出数は5件であった．内訳は，性別では男性2件，女性3件であり，年齢別では10歳未満2件，40歳代2件，60歳代1件であった．推定感染地域は，国内4件，不明1件で，推定感染経路は，その他1件，不明4件であった．検出された病原体では，水痘-帯状疱疹ウイルス1件，不明4件であった．

⑤　クロイツフェルト・ヤコブ病

年間届出数は1件で，年齢は70歳代で，性別は女性であった．病型は，古典型クロイツフェルト・ヤコブ病で，推定感染経路及び推定感染地域は不明であった

⑥　劇症型溶血性レンサ球菌感染症

年間届出数は8件で，過去10年間で最も多かった．内訳は，性別では，男性7件，女性1件であり，年齢別では40歳代1件，50歳代1件，70歳代2件，80歳代2件，90歳代2件であった．推定感染経路は，創傷感染3件，その他4件，不明1件で，推定感染地域はいずれも国内であった．血清群は，A群4件，G群4件であった．

⑦　後天性免疫不全症候群（HIV感染症を含む）

年間届出数は5件で前年（2件）より増加した．内訳では，性別はいずれも男性であり，年齢別では10歳代1件，20歳代3件，40歳代1件であった．病型はAIDS 2件，無症候性キャリア2件，その他（早期梅毒合併）1件であった．AIDS患者の指標疾患は，サイトメガロウイルス感染症1件，非ホジキンリンパ腫及びHIV消耗性症候群（全身衰弱又はスリム病）1件であった．推定感染経路は性的接触（異性間2件，同性間2件，不明1件）で，推定感染地域は国内4件，不明1件であった．

⑧　侵襲性インフルエンザ菌感染症

年間届出数は3件であった．内訳は，性別では，男性2件，女性1件で，年齢別では10歳未満2件，70歳代1件であった．推定感染経路は飛沫・飛沫核感染3件であり，経気道感染が考えられた．推定感染地域は国内3件であった．ワクチン接種歴は，4回2件，不明1件であった．

⑨　侵襲性肺炎球菌感染症

年間届出数は13件であった．内訳は，性別では男性9件，女性4件であり，年齢別では10歳未満1件，50歳代2件，60歳代2件，70歳代3件，80歳代3件，90歳代2件であった．推定感染経路は飛沫・飛沫核感染2件，その他2件，不明9件で，推定感染地域はいずれも国内であった．ワクチン接種歴は3回1件，1回3件，なし4件，不明5件であった．

⑩　梅毒

年間届出数は67件で，前年（78件）より減少した．内訳は，病型は早期顕症梅毒Ⅰ期25件，早期顕症梅毒Ⅱ期25件，晩期顕症梅毒1件，無症候16件であった．年齢別では10歳代1件，20歳代19件，30歳代10件，40歳代21件，50歳代11件，60歳代2件，70歳代2件，80歳以上1件であった．性別では男性51件，女性16件であり，性別で症状を比較した場合，「患者」の割合は，男性では約86%，女性では約44%であった．推定感染地域は国内が59件，不明8件であった．推定感染経路は，性的接触57件（同性間2件，異性間45件，性別不明10件），不明10件であった．

⑪　播種性クリプトコックス症

年間届出数は5件であった．内訳は，性別ではいずれも男

性であり，年齢別では 50 歳代 1 件，70 歳代 3 件，90 歳代 1 件であった．推定感染原因は，免疫不全 5 件であり，そのうち 4 件はステロイドの投与があった．推定感染地域はいずれも国内であった．

⑫　百日咳

年間届出数は 42 件で，前年（78 件）より減少した．内訳は，性別では男性 23 件，女性 19 件であり，年齢別では 10 歳未満 24 件，10 歳代 16 件，20 歳代 1 件，60 歳代 1 件であった．推定感染経路は家族内感染 33 件，不明 9 件で，推定感染地域は国内であった．百日咳含有ワクチン接種歴は，4 回 20 件，3 回 1 件，不明 21 件であった．診断方法は，抗原検査 41 件，遺伝子検査 1 件であった．

表 1　全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	2024 年	前年
二類	結核	117	80
三類	腸管出血性大腸菌感染症	19	11
四類	A 型肝炎	1	0
	日本紅斑熱	8	7
	レジオネラ症	23	14
五類	アメーバ赤痢	3	1
	ウイルス性肝炎（E 型，A 型を除く）	1	2
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	10	1
	急性脳炎	5	0
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	2
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	8	5
	後天性免疫不全症候群	5	2
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	3	1
	侵襲性肺炎球菌感染症	13	2
	梅毒	67	78
	播種性クリプトコックス症	5	2
	百日咳	42	78

2　定点把握対象疾患（週報）の動向（表 2）

（1）インフルエンザ／新型コロナウイルス感染症定点

①　インフルエンザ

年間報告数は 11,080 人であり，前年（13,896 人）より減少したが，報告数が少なかった令和 2 年（3,095 人），令和 3 年（4 人），令和 4 年（42 人）に比べ報告数は多かった．本年は，前年の流行が持続した状況から始まっており，第 1 週は 13.59 人／定点であった．その後，第 13 週まで 10 人／定点を越えた状況で推移した後減少し，第 17 週には 1 人／定点を下回り，それ以降は 1 人／定点未満の低い水準で推移した．2024／2025 シーズンに入り，第 46 週に 1.03 人／定点と 1 人／定点を超えて流行期に入ったと判断された．その後急増し，第 50 週には 13.35 人／定点と注意報発令基準を超え，第 52 週には，警報発令基準を超える 55.35 人／定点と，定点あたりの患者報告数としては過去最多となった．年齢層別報告数では，4 歳以下 12.7%，5 ～9 歳 29.8%，10 ～14 歳 22.3%，15 ～19 歳 6.7%，20 歳以上 28.5%であり，5 ～14 歳の割合が高かった．

②　新型コロナウイルス感染症

年間報告数は 12,829 人であった．本疾患は，令和 5 年 5 月 8 日から定点把握対象疾患となってからの報告数であることを考慮すると，前年（10,061 人）より減少したと考えられる．本年の報告数では，第 2 週に 10 人／定点を越え，第 4 週にピーク（16.32 人／定点）となった後，第 8 週には 10 人／定点を下回った．その後，第 18 週に 1.30 人／定点まで減少した後，増加へ転じた．第 30 週に再びピーク（20.00 人／定点）を示した後，第 44 週に 0.59 人／定点まで減少した．その後，増加傾向となり第 52 週には 8.03 人／定点となった．年齢層別報告数は，4 歳以下 8.4%，5 ～9 歳 7.1%，10 ～14 歳 7.7%，15 ～19 歳 5.0%，20 歳代 7.2%，30 歳代 8.9%，40 歳代 11.2%，50 歳代 10.8%，60 歳代 10.0%，70 歳代 12.0%，80 歳以上 11.7%であった．

（2）小児科定点

①　RS ウイルス感染症

年間報告数は 1,143 人と，前年（1,591 人）より減少した．調査開始以降最も多い報告数であった令和 3 年以降減少しており，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行以前の報告数より，やや低い数値であった．本年は 4 月初旬（第 14 週）に 1 人／定点を超えゆるやかに増加し，7 月下旬（第 31 週）にピーク（4.83 人／定点）を迎えた．その後減少し，第 38 週以降 1 人／定点より少なく推移した．年齢層別報告数は，0 歳 26.2%，1 歳 38.5%，2 歳 20.0%，3 歳 9.6%，4 歳以上 5.7%であり，2 歳までの乳幼児からの報告が多かった．

②　咽頭結膜熱

年間報告数は 424 人と，大きな流行が見られた前年（1,117 人）より減少した．本年は，前年 11 月中旬（第 46 週）にピーク（3.78 人／定点）を示した流行を受け，第 1 週に 1.61 人／定点から始まった後，ゆるやかに減少し，5 月下旬（第 22 週，23 週）に 0.61 人／定点とやや増加が見られたが，第 14 週以降は 0.5 人／定点以下で推移した．年齢層別報告数は，0 ～1 歳 41.3%，2～3 歳 27.1%，4～5 歳 17.0%，6～7 歳 6.8%，8 歳以上 7.8%であり，5 歳以下が約 85%を占めた．

③　A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は 1,506 人と，前年（544 人）より増加した．本年前半は，2 人／定点前後で推移し，第 33 週以降，1 人／定

点未満で推移した．年齢層別報告数は，0 ～1 歳 5.4%，2 ～3 歳 15.5%，4 ～5 歳 25.6%，6 ～7 歳 21.0%，8 ～9 歳 15.9%，10 ～14 歳 11.7%，15 歳以上 4.8%と，2 ～9 歳が全体の約 8 割を占めた．

④　感染性胃腸炎

年間報告数は 4,700 人と，前年（5,193 人）より減少した．本年は，年初から第 7 週にかけて，第 3 週をピーク（7.74 人／定点）とする山が見られた後，1.5 ～4 人／定点前後で推移したが，第 40 週からやや増加し，5 人／定点前後で推移した．年齢層別報告数は，0 ～1 歳 20.8%，2 ～3 歳 21.9%，4 ～5 歳 15.0%，6 ～7 歳 10.7%，8 ～9 歳 8.3%，10 ～14 歳 10.4%，15 歳以上 12.9%と 5 歳以下の乳幼児が全体の約 6 割を占めた．

⑤　水痘

年間報告数は 127 人と前年（68 人）より増加した．本年は大きなピークは見られず，年間通じて低水準（0.40 人／定点以下）で推移した．年齢層別報告数は，0 ～1 歳 5.5%，2 ～3 歳 5.5%，4 ～5 歳 7.1%，6 ～7 歳 19.7%，8 ～9 歳 29.9%と 10 歳未満で 67.7%であったが，10～14 歳も 25.2%を占めた．

⑥　手足口病

年間報告数は 3,608 人と前年（530 人）より大きく増加し，過去 10 年間では，平成 27 年に次いで多い報告数であった．本年は，年初からゆるやかに増加していたが，第 21 週以降大きく増加し，第 28 週（16.30 人／定点）にピークを示した後減少し，第 35 週には 1.13 人／定点となった．その後ゆるやかに減少し第 52 週には 0.35 人／定点となった．年齢層別報告数は，0 ～1 歳 34.6%，2 ～3 歳 37.9%，4 ～5 歳 17.9%，6 ～7 歳 5.6%，8 歳以上 4.0%であり，5 歳以下が全体の約 9 割を占めた．

⑦　伝染性紅斑

年間報告数は 43 人と，前年（7 人）より増加した．本年は，令和 3 年以降，10 人未満の報告数で推移していたところから 4 年ぶりの増加となった．週別の患者報告数では，年初から 0.1 人／定点未満で推移していたが，第 47 週以降報告が増加し，第 51 週に 0.52 人／定点となった．年齢層別報告数は，0 ～1 歳 4.7%，2～3 歳 20.9%，4～5 歳 34.9%，6～7 歳 25.6%，8 歳以上 14.0%と，2～7 歳からの報告が多かった．

⑧　突発性発しん

年間報告数は 347 人と，過去 10 年間では，前年（346 人）に次いで少ない報告数であった．本年もピークは示さず，大きな季節的変動も見られないまま，一定の範囲内（0.04 ～0.48 人／定点）で推移した．年齢層別報告数は 0 ～1 歳 86.2%，2～3 歳 13.0%，4～5 歳 0.6%と，1 歳以下が大半を占めた．

⑨　ヘルパンギーナ

年間報告数は 303 人と，過去 10 年で最も多い報告数であった前年（1,107 人）より大きく減少した．本年は，5 月下旬（第 20 週）から報告数が増加し始め，6 月下旬（第 26 週）にピーク（1.17 人／定点）を示した後，減少し低い値で推移した．年齢層別報告数では，0～1 歳 39.9%，2～3 歳 35.3%，4～5 歳 15.2%，6～7 歳 5.6%，8 歳以上 4.0%であり，5 歳以下の乳幼児が約 9 割を占めた．

⑩　流行性耳下腺炎

年間報告数は 13 人と，前年（22 人）より減少しており，過去 10 年間では最も少ない報告数であった．ここ 10 年では，平成 28 年から 29 年にかけて大きな流行があった．年齢層別報告数は，6 歳が 4 人（30.8%）と最も多かった．

（3）眼科定点

①　急性出血性結膜炎

年間報告数は 4 人と，前年（2 人）より増加し，過去 5 年間では最多の報告数であった．年齢層別報告数は，10 歳代 2 人，20 歳代 1 人，40 歳代 1 人であった．

②　流行性角結膜炎

年間報告数は 15 人と前年（26 人）より減少した．過去 10 年間では，令和 4 年（11 人）に次いで 2 番目に少ない報告数であった．年齢層別報告数は，20 歳未満 1 人（6.7%），20 歳代 2 人（13.3%），30 歳代 5 人（33.3%），40 歳代 5 人（33.3%），50 歳代 2 人（13.3%）と，30 歳代，40 歳代の年齢層が多かった．

（4）基幹定点

①　細菌性髄膜炎

年間報告数は 6 人で，年齢層別報告は 6 か月未満 1 人，40 歳代 1 人，50 歳代 1 人，60 歳代 1 人，70 歳代 2 人であった．

②　無菌性髄膜炎

年間報告数は 9 人（前年 12 人）で，過去 10 年間では，前年に次いで 2 番目に多い報告数であった．年齢層別報告数は，6 か月未満 1 人，10 歳代 1 人，20 歳代 2 人，30 歳代 2 人，40 歳代 3 人であった．

③　マイコプラズマ肺炎

年間報告数は 57 人と，前年（1 人）より大きく増加した．本年は，5 月下旬（第 22 週）から報告が続き第 36 週に 1 人／定点と最も多い報告となった．その後も，増減しながらも報告がやや多い状況が続いた．年齢層別報告数は，10 歳未満 20 人，10 歳代 16 人，20 歳代 8 人，30 歳代 6 人，40 歳代 2 人，70 歳以上 5 人であった．

④　クラミジア肺炎，感染性胃腸炎（ロタウイルス）

前年に引き続き，本年も報告はなかった．

表 2　定点把握対象疾患(週報)の報告数

疾病名	2024 年	前年
インフルエンザ	11,080	13,896
新型コロナウイルス感染症	12,829	10,061
RS ウイルス感染症	1,143	1,591
咽頭結膜熱	424	1,117
A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,506	544
感染性胃腸炎	4,700	5,193
水痘	127	68
手足口病	3,608	530
伝染性紅斑	43	7
突発性発しん	347	346
ヘルパンギーナ	303	1,107
流行性耳下腺炎	13	22
急性出血性結膜炎	4	2
流行性角結膜炎	15	26
細菌性髄膜炎	6	5
無菌性髄膜炎	9	12
マイコプラズマ肺炎	57	1
クラミジア肺炎	−	−
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	−	−

3　定点把握対象疾患（月報）の動向(表 3)

（1）基幹定点

薬剤耐性菌感染症の総報告数は 255 人で，前年（254 人）と同程度であった．疾患別の報告数においては，メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の割合が 99.6%を占めた．

① メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は 254 人であり，前年（253 人）と同程度であった．性別では，男性 155 人（前年 145 人），女性 99 人（前年 108 人）と，男性からの報告が多かった．月別報告数では，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず，年間を通じて発生した．年齢層別報告数は，10 歳未満 9.8%，10 歳代 0.8%，20 歳代 2.8%，30 歳代 0.8%，40 歳代 3.9%，50 歳代 5.5%，60 歳代 8.3%，70 歳以上 68.1%と，70 歳以上からの報告が最多であった．

② ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

前年に引き続き，本年も報告はなかった．過去 5 年では，0～3 人で推移している．

③ 薬剤耐性緑膿菌感染症

年間報告数は 1 人（前年 1 人）であった．過去 5 年では，毎年 0 ～3 人で推移している．年齢層別報告数は，70 歳以上が 1 人であった．

（2）性感染症定点

性感染症の総報告数は 477 人で，前年（543 人）より減少した．性別では，男性 287 人（前年 371 人），女性 190 人（前年 172 人）と，前年と比較すると男性は減少したが，女性は増加した．疾患別では，性器クラミジア感染症（50.5%）が約半数を占め，次いで性器ヘルペスウイルス感染症（31.9%），尖圭コンジローマ（11.3%），淋菌感染症（6.3%）の順に多かった．

① 性器クラミジア感染症

年間報告数は 241 人と前年（286 人）より減少し，男性の報告数は 201 人と前年（253 人）より減少したが，全体の約 83%を占めた．女性は 40 人と，前年（33 人）より増加した．月別報告数では，男性は 5 月が最多で 27 人，9 月が最少で 10 人，女性では 6 月が最多で 8 人であった．年齢層別報告数では，10 歳代 2.5%，20 歳代 41.9%，30 歳代 27.4%，40 歳代 15.8%，50 歳以上 12.4%と，20 歳代からの報告が最多であった．

② 性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は 152 人と，前年（147 人）よりわずかに増加した．男性の報告数は 22 人（前年 19 人），女性の報告数は 130 人（前年 128 人）であった．性感染症全体では男性の報告数が多いが，本疾患は女性が約 86%を占めており，他の疾患に比べ女性の割合が高いのが特徴である．月別報告数では，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず，年間を通じて発生した．年齢層別報告数は，10 歳代 2.0%，20 歳代 21.7%，30 歳代 19.1%，40 歳代 14.5%，50 歳代 25.7%，60 歳代 4.6%，70 歳以上 12.5%と，20 ～50 歳代を中心に，幅広い年齢層で発生した．

③ 尖圭コンジローマ

年間報告数は 54 人と，前年（68 人）より減少した．性別では，男性が 43 人と前年（61 人）より減少し，女性は 11 人と前年（7 人）より増加した．年齢層別報告数は，10 歳代 5.6%，20 歳代 31.5%，30 歳代 25.9%，40 歳代 14.8%，50 歳代 16.7%，60 歳代 1.9%，70 歳以上 3.7%と，20 ～50 歳代からの報告が多かった．

④ 淋菌感染症

年間報告数は 30 人と，前年（42 人）より減少した．性別では，男性 21 人（前年 38 人），女性 9 人（前年 4 人）と性器クラミジア，尖圭コンジローマと同じく男性からの報告が多く，7 割を占めた．年齢層別報告数は，20 歳代 53.3%，30 歳代 26.7%，40 歳代 13.3%，50 歳代 3.3%，60 歳代 3.3%で，20 ～30 歳代からの報告が多かった．

表3　定点把握対象疾患(月報)の報告数

疾病名	2024年	前年
性器クラミジア感染症	241	286
性器ヘルペスウイルス感染症	152	147
尖圭コンジローマ	54	68
淋菌感染症	30	42
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	254	253
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	－	－
薬剤耐性緑膿菌感染症	1	1

Ⅳ　まとめ

2024年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた．全数把握対象疾患の届出数は17疾患331件であった．

結核の年間届出数は，前年より増加した．年齢別では70歳以上の高齢者の割合が高く，性別では「女性」がやや多かった．年齢別に類型を比較した場合，「患者」は70歳以上では83.1%であったのに対し，70歳未満では67.5%であった．

また，本年の特徴としては，20歳代の患者が前年より増加しており，これは結核蔓延国であるアジア諸国で感染し日本で結核を発症した外国人が増えたことによる．そのため，今後外国生まれ結核患者への対応も重要となる．

腸管出血性大腸菌感染症は，前年より増加した．感染経路は経口感染が多かったが，同居家族からの接触感染による例もあった．引き続き，手洗い・消毒の徹底，食品の十分な加熱及び衛生的な取り扱いなど予防啓発をしっかり行うことが必要である．

ダニ媒介感染症では，日本紅斑熱が8月～11月に野外作業機会の多い中高年者を中心に8件報告された．ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識の普及とともに，予防対策の啓発も重要と考えられた．

カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症は，前年より増加した．

梅毒は，近年，全国的に届出が増加傾向にあり，徳島県においても，ここ数年高い報告数となっている．20～50歳代を中心とした幅広い年齢層に対し，積極的な感染予防啓発の推進が重要と考えられた．

定点把握対象疾患（週報）では，新型コロナウイルス感染症の流行以前の報告数に近づいた疾患や，前年より大きく流行した疾患もあった．

新型コロナウイルス感染症では，1月から2月にかけての流行と，7月から8月にかけての流行が見られた．インフルエンザは，前年より報告数は減少したが，第52週の定点あたり報告数は過去最多となっており，12月に急激な増加が見られた．A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は，前年の約3倍の報告数と大きく増加し，新型コロナウイルス感染症流行以前の水準に近づいた．手足口病は，前年の約7倍と大きく増加し，過去10年間では平成27年に次いで多い報告数となった．伝染性紅斑は，全国と同様に年後半から流行が見られ，前年より報告数が増加した．マイコプラズマ肺炎は，報告数が少なかった前年と異なり，報告数が多く，新型コロナウイルス感染症の流行以前の感染状況に近づいた．

前年大きな流行が見られた咽頭結膜熱，ヘルパンギーナは，報告数は減少した．

眼科定点報告疾患，基幹定点報告疾患については，前年と傾向は変わらず年間を通じて報告数は低値で推移した．

定点把握対象疾患（月報）の基幹定点報告疾患である薬剤耐性菌感染症については，総報告数に大きな変化は見られず，メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が大半を占めた．

性感染症定点報告疾患については，総報告数は前年より減少し，男女別報告数は前年と同様に，男性からの報告が多かった．報告数の多い20～40歳代を中心に，引き続き予防啓発を行うとともに，若年者に対する予防教育も重要と思われた．

今後も，関係する医療機関や保健所等の協力を得ながらデータの収集や解析を行い，感染症の発生動向を注視していくとともに，迅速かつ適切な情報提供を行っていきたい．